原市場が生んだ偉人、山川兄弟

-郷土館収蔵資料目録７『原市場地区諸家文書目録』の成果を中心に-

【第二回　山川家の人々】

第一回では、江戸時代の山川家と題して、文治郎が質屋業を営んでいたところまで述べました。今回は、幕末から近代にかけての山川家の人物をご紹介します。

１　幕末の動乱の中で　-新選組と袂（たもと）を分かつ-

文次郎には達蔵、竹蔵、春之助という三人の子がいました。達蔵は天保3(1832)年生まれ、竹蔵は天保６年頃の生まれであると考えられます。春之助については残念ながら不明です。

三人のうち達蔵と竹蔵は、幕末の混乱した社会の中で、新徴組（しんちょうぐみ）という浪士隊に身を投じていました。先に記した竹蔵の生まれ年も、新徴組の名簿に記載されていた年齢から計算したものです。

新徴組は、幕末に活躍した江戸幕府の警備組織です。もともとは志士清河八郎の発案により文久２(1862)年に浪士組として募集され、文久３年には14代将軍徳川家茂の上洛に合わせて上京しました。しかし、方向性の違いからそこで清河に従い江戸に戻る者と、京都に残る者とに分かれました。このとき京都に残ったのが、のちの新選組です。

清河に従い江戸に戻った達蔵たち浪士組は、清河が暗殺されたのち新徴組と名を変え、庄内藩酒井家預かりとなりました。彼らは庄内藩のもと、主に江戸市中警護の任を務めました。また、慶応３(1867)年には江戸の薩摩藩邸焼き討ち事件にも参加しています。戊辰戦争後は、旧庄内藩士らとともに庄内地方の開墾作業に従事しました。

達蔵・竹蔵は浪士組として上京する際、「道中世話役」「先番」という役に任じられていました。これは、隊の中でも重立った人物に与えられる役職で、後に新選組の局長となる近藤勇などよりも上位に位置していました。その理由としては、達蔵・竹蔵が師事していた北有馬太郎（中村貞太郎）が、浪士組以前に清河により結成された虎尾の会に名を連ねていたことが考えられます。このように、新徴組内でも比較的上位にいたと思われる二人ですが、元治元(1864)年９月に竹蔵が「病乱」につき組除けのうえ達蔵へ引渡しとなったため、二人とも赤工村へ帰村しています。

なお、文久３年の名簿によれば、赤工村からは達蔵・竹蔵の他に岡田助右衛門・福永正三という人物が新徴組へ加わったとされています。しかし、この二

人については今のところ他に名前が確認できる史料が無く、詳細は不明です。

下赤工村へ戻ったのち、明治時代になると達蔵は下赤工村の戸長を務め、明治 23(1890)年に亡くなっています。一方、竹蔵の没年などについて、詳しいことは不明です。

この達蔵のもとに生まれたのが、義太郎、信次郎、弘毅の三兄弟でした。また、信次郎と弘毅の間には「かつ」という女児もいました。

３　原市場が生んだ秀才　-山川兄弟-

義太郎は万延元(1860)年に生まれ、明治 8(1875)年に上京し、工部大学校（現東京大学工学部）にて電信学を修め、明治 15 年に工学士となりました。明治 20 年に帝国大学工科大学助教授になり、同 29 年には官命を受けて欧米諸国に 3 年間留学しています。明治 32 年に帰国すると東京帝国大学の教授となり、工学博士の学位を受けました。大正 3(1914)年から同 5 年まで電気学会の会長を務めたほか、同 8 年には再び海外派遣を命じられ、帰国後の同 12 年に東京帝国大学教授を退官して名誉教授となりました。これらの功績により数々の叙勲を授けられ、昭和 8(1933)年に亡くなっています。

義太郎には子供がいなかったため、甥の義信を養子にして跡継ぎとしました。義信も後に東京帝国大学を卒業し、医学博士となっています。

信次郎は、慶応 3(1867)年の生まれです。明治 16 年に上京し、同 18 年に東京第一高等中学校(東京大学教養学部)へ入学し、英文学を修めました。卒業後は熊本の第五高等学校(現熊本大学)や第一高等学校(現東京大学教養学部)等に赴任し、最終的に東京神田の私立大成尋常中学校(現大成高等学校)の教師となりました。

第一高等中学校時代、信次郎は夏目漱石と同級生でした。彼らの親交は卒業後も続き、熊本の第五高等学校赴任も漱石に呼ばれたことによるものでした。信次郎と漱石は明治 30(1897)年 12 月末から翌年初めにかけて玉名郡の小天(おあま)温泉へと出かけていますが、この旅こそ後に漱石初期の名作と言われる『草枕』のモデルとなった旅行でした。

弘毅は、信次郎より 8 歳年下の明治 7 年に生まれ、同 33 年に東京帝国大学理科大学物理学科(現東京大学理学部)を卒業し、同 37 年から 42 年まで海軍兵学校の文官教授を務めました。同年第一高等学校の教授となりましたが、大正 7 年に亡くなっています。

第一回、第二回と、山川家文書の概要や現段階で把握できる山川家の家系、

そして三兄弟の経歴についてご紹介しました。いよいよ次回からは山川三兄弟にスポットをあて、義太郎が帝国大学工科大学助教授を務めていた明治20年代後半における彼らの生活について、見ていきます。